

今こそ 生活科学の出番です

大阪市立大学生活科学部同窓会事務局

TEL/FAX:06-6605-2804

e-mail:seika@osaka-cu.com <http://www.osaka-cu.net/seika/>

生活科学部同窓会

検索

GREETING ご挨拶



生活科学部同窓会会長

岸本 幸臣

今年2015年は、生活科学部の源流となる大阪市立の高等実修女学校が設立されて95年目になります。ほぼ一世紀の歴史を重ねてきたのかと思うと、感慨ひとしおのことがあります。卒業生のみなさんが、いろんな分野で生き生きと活躍している姿を拝見したりお聞きしたりすると、とても誇らしく思います。みなさんが家庭で企業で学校で、あるいは違った場所で、常に前向きに頑張っておられることは、それが家政学や生活科学とは違う領域であっても、私達にとってはとても嬉しいことです。多様な人生を歩む卒業生のみなさんが、青春の一時期を大阪市立大学の家政学部・生活科学部で過ごされたことは、その人生にどんな影響を与えることになったのだろうか、いつも楽しみに拝見しています。

私も大学教員になり40年、年を重ねたせいか過去を振り返ることが多くなりました。この間、時代や社会は驚く程に変質したように痛感しています。かつては時間の流れがもっと緩やかだったように思います。勉強であれ研究であれ、また社会の仕事や家庭の家事も、まず自分で考えそれから行動に移す時間のゆとりや心の余裕があったように思うのです。コンピューターや機械化は、人間の仕事を軽減してもっと自由な時間を与えてくれるはずでした。でも、この40年の間に、私たちの仕事は逆にどんどん増え、労働時間はますます長時間化しています。「ゆっくりと考えて、それから自分の意志で」なんてことは、現代社会では極めて困難になっています。

このまま時代や社会の変化に無批判に流されて行くと、その先に待ちかまえている生活とはどんなものだろうかと不安になります。私たちが本来志向するはずだった「安心して心豊かに生きたい!」そんな生活に繋がって行けるのだろうか?どうも逆の方向に進んでいるように思えてなりません。「家政学・生活科学は人間解放の科学」という視点を今一度思い起こし、私たちがそれぞれの道で、自分自身の仕事を生活科学的に再検証してみる時期にあるのではないのでしょうか。そこから感じる素直な疑問や矛盾こそが、無批判に流されないための大切な契機になってくれると思います。それをどんな風に一つの声にまとめるのか、時代を変える力にするのか、そのことが生活科学の新たな課題になっているように思うのです。

平成27年9月10日

EVENT イベント

HOME COMING DAY

平成27年度大阪市立大学ホームカミングデー
生活科学部同窓会 総会・講演会のお知らせ

平成27年11月3日(火・祝)皆様お誘い合わせてご参加下さい。総会当日は大学祭と全学同窓会連絡会が主催するホームカミングデーの開催中で、各種の催しが一日中大学内で行われています。ご参加をお待ちしております。



日 時: 平成27年11月3日(火・祝) 10:30~12:00
会 場: 研究者交流室(学術情報総合センター10F)

【プログラム】 10:00~ 開場・受付開始
10:30~11:00 平成27年度生活科学部同窓会総会
11:00~12:00 同窓生による講演会

〈講演&ワインのテイスティング〉 ワインの効用とおいしさの科学

講師:山梨大学生命環境学部 ワイン科学研究センター
久本 雅嗣 准教授(食品栄養科学専攻後期修了)

ワインは健康に良いと考えられていますが、本当でしょうか……?ワインのポリフェノールを中心に健康への効果やおいしさについての最近の研究トピックス、現在の国内外のブドウやワインの生産現場や消費動向、さらに気軽にワインを楽しむ方法についてご紹介いたします。卒業生のみなさま、お誘いあわせのうえご参加ください。

※他、各学部同窓会 クラブ催し物がございます。

※詳細は大学ホームページをご覧ください。

同窓会事務システム についてのご案内

生活科学部同窓会への住所変更などの御連絡ならびにお問い合わせは、下記の連絡先をお願いいたします。なお、今後の生活科学部同窓会からの御連絡につきましては、同窓会ホームページを活用してまいります。ぜひ生活科学部のホームページをご覧ください。
<http://www.osaka-cu.net/seika/>

大阪市立大学生活科学部 同窓会事務局

TEL/FAX:06-6605-2804

E-Mail:seika@osaka-cu.com

<http://www.osaka-cu.net/seika/>





地域総幸福量を高める21世紀型の生活科学へ

生活科学研究科長
西川 禎一

わが国の2015年の高齢化率は26.0%、推計によると2030年には31.5%に達します。このような人口減少と超高齢化の同時進行という現実を前にして、高い経済成長を回復させなければ未来は無いと言う声も耳にします。しかし、懸命に働いてGDP世界第3位となつてはいるものの国民一人あたりGDPでは25位ですし、そもそも幸福度とか生活の質は経済成長と必ずしも相関しないのではないかとの思いが人々の間に広がっています。プータン国王来日時に「GDPよりも国民総幸福量(GNH)」を国是とする国として日本のマスコミが目撃したり、トマ・ピケティ氏の「21世紀の資本」がベストセラーになったりしているのも、このような人々の気持ちを反映しているのではないのでしょうか。

閉塞感が漂うわが国の厳しい状況の中で、地域の、関西の、日本の幸福量高め、そして地球市民としての倫理感を養うために最も重要なことは、無縁化する人々の関係性とコミュニティ感覚を再生し、互いを縛ることなく柔らかい絆で結ばれているような懐かしさのある未来社会を創造することだと考えています。食には人と人を結びつけて幸福感を生み出しながら健康を推進す

る大きな力がありますし、デザインには住まいからコミュニティーまでまちづくりを広くカバーする創造性があります。また、人文社会科学は個人のケアから社会プランまで、人と社会のありようを究める洞察力を備えています。そこで、学部学生には3学科横断授業である「QOLプロモーター養成コースを、大学院では3講座を横断する「生活科学論ゼミナール」を設け、学生の皆さんが自分の専門だけにとどまらず地域生活のクリエイターとしての意識と感性を磨けるように努めています。しかし、研究者や研究自体のライフスパンよりも現代社会の変容の方が急速であり、強い危機感を覚えています。

生活科学研究者は、その学問性を深め教授し専門性の高い社会人育成に努めると同時に、生活者の幸福度に思いを巡らせ、自分の専門を超えて21世紀の生活パラダイムという未だ見ぬ答えを探らねばなりません。この大きな課題の答えは、学生たちと卒業生の皆さんと私たち教員との対話と協働の中から見つかるかと信じています。21世紀型の生活科学への進化のために、皆様のアイデアと叱咤激励を期待しています。

学科近況報告 1

平成27年度 食品栄養科学科主任

佐伯 茂

食品栄養科学科および大学院食・健康科学講座には、14名の常勤教員と5名の特任教員が在籍し、食品栄養科学の教育・研究、管理栄養士の育成を一元となって推進しています。常勤教員の内訳は、教授6名(春木、西川、佐伯、羽生、由田、増田)、准教授6名(上田、安井、市川、小島、古澤、金)、講師1名(福村)、助教1名(千須和)です。特任教員の内訳は、特任助教2名(加藤、林)、特任助手3名(森本、西田、亀田)です。

増田先生は、徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部の教授を務められていましたが、平成27年4月1日に教授として着任されました。また、増田先生は、平成8年3月末まで当学科に在籍して教育・研究に従事されたご経験があり、今後は、食品有機化学分野の教育・研究を先導すると期待されます。一方、平成27年3月末に、小西先生が退職されて名誉教授となられ、平成27年4月1日より、畿央大学健康科学部健康栄養学科に教授・学科長として着任され、今度とも食品科学分野の教育・研究、管理栄養士の育成に携われます。

西川先生は、平成26年度より生活科学部長および生活科学研究科長の重責を担われ、生活科学部と生活科学研究科の発展にご尽力されています。また、平成26年4月、あべのハルカスに「大阪市立大学医学部附属病院 先端予防医療部附属クリニックMedCity21」が開設され、羽生先生と安井先生は、臨床栄養学の見地から栄養指導に携われ、健康都市大阪の実現に寄与することが期待されています。

平成26年度の管理栄養士国家試験の合格率100%を達成することができました。当学科は、生命科学をはじめとする基礎的研究に立脚した基礎教育を推進し、食と栄養に関する諸問題の解決に取り組む専門技術者、研究者、指導的立場を担う管理栄養士の養成を目指していますが、今後とも、これらの教育・研究方針の維持に努めます。

学科近況報告 2

平成27年度 居住環境学科主任

渡部 嗣道

居住環境学科では、16名の常勤教員が在籍し、そのうち教授は8名(多治見、永村、藤田、岡田、森、小伊藤、三浦、渡部)、准教授は5名(土井、酒井、上田、小池、福田)、講師は2名(生田、ファナム)、助教は1名(西岡)です。主な学科の近況を卒業生の皆様にご報告します。

2015年4月25日(金)・26日(土)の2日間、「第12回 居住環境デザインフォーラム」が開催されました。本フォーラムは、生活科学研究科で居住環境学を学ぶ学生による学習成果の発表の場として、2004年以降、毎年開催されており、学部4年間の教育プログラムの全体像を提示し、学生が課題に取り組む上での目的意識を明確にすることを目的としています。1回生から4回生の設計課題、卒業研究、卒業制作、修士設計までの展示と発表が行われた後、各学年の優秀学生も発表され、賞状が授与されました。また、恒例の記念講演は、オーストラリアで都市デザイナーとして活躍しているパリー・シュルトン氏をお招きし、西洋から見た日本の都市について講演していただきました。

2015年8月8日(土)・9日(日)の2日間、オープンキャンパスが開催されました。本学科の関連施設の参加者は、初日300名、2日目198名となり、それぞれの会場は活況を呈していました。教職員に加えて在校生も一丸となって、学科の魅力を知ってもらうため、様々な取り組みを行いました。

(公社)日本建築士会連合会 第8回まちづくり賞選考委員会において、2007年より取り組んできた豊崎プラザを中心とした「大阪長屋保全プロジェクト(藤田教授、小伊藤教授、三浦教授、小池准教授)」が、まちづくり優秀賞を受賞しました。

多治見教授は2011年7月から大阪市住吉区区政会議の議長を務め、住吉区のまちづくり推進への貢献が認められたため、住吉区「区長特別表彰」を受賞されました。

また、本学では、都市大阪を基盤として、防災教育・防災研究を推進するため、2015年3月に都市防災教育研究センターが開設されましたが、その初代所長に森教授が就任されました。

以上のように居住環境学科の教員・学生一同、多くの活動に取り組んでおります。今後も、卒業生の皆様のご指導・ご支援をよろしくお願い申し上げます。

学科近況報告 3

平成27年度 人間福祉学科主任

岩間 伸之

人間福祉学科は、現在17名の教員(教授6、特認教授2、准教授5、講師2、特認講師1、助教1)で構成されています。

人間福祉学科では、この2年間、時代の要請に応えることのできる学科への「脱皮」に向けて取り組んできました。現代社会における地域生活上の課題は、多様化・深刻化・潜在化の様相を呈しています。そうした課題に敏感に対応できる研究・教育体制の構築は、本学科においては不可避の宿命的テーマといえます。

学科として従来から取り組んできた福祉と心理を基軸としたアプローチの枠を超え、社会開発や国際協力、人口減少社会における地域格差、生活困窮者や子どもの貧困等への対応を視野に入れた新機軸の方向性を今後打ち出していくことになりました。

教員の布陣も、この路線に沿いながら強化を図っています。松島恭子教授と畠中宗一教授の退職を受け、2015年度からは、松木洋人准教授と館直彦特任教授に着任いただきました。来年度以降も新機軸に合致する新しい教員の拡充を予定しています。

その一方で、学部教育の質的向上にも取り組んでいます。より実践的な学びの充実に向け、1年次の配当科目として「共生社会演習」を新設しました。これは、生活困窮家庭の中学生への学習支援や障害のある人の就労支援のサポートをプログラムに組み込むものです。早い時期からこうした体験を積むことによって、その後の専門職養成をより深めることができます。

また、全学的での取り組みにも積極的に参画しています。新設された都市防災教育研究センターの兼任研究員として、野村恭代准教授と私が活動しています。

人間福祉学科のさらなる「脱皮」に向け、引き続き卒業生のみならず皆様のご支援をいただければ幸いです。

SPECIAL

— 退職された教員の方に思い出を語っていただきました



杉本キャンパスの思い出

平成27年3月退職／現・畿央大学健康科学部健康栄養学科長

小西洋太郎

市大での33年間の教員生活(食品栄養科学科)と学部・修士時代の6年を合わせると、途中6年半は市大を離れていましたが、トータル39年間、じつに人生の約6割を杉本キャンパスで過ごしたことになります。数多い思い出の一端を綴ってみます。

私が入学した昭和44年は大学紛争の真最中で、1号館地区や教養地区の建物はロックアウトされ、半年間授業は開講されませんでした。キャンパス内は連日のように学生集会があり、音の割れたスピーカーから流れるアジ演説やシュプレヒコールが繰り返されていました。火炎瓶でヤシの樹が一部焼けたこともあります。セクト間のゲバルトで死傷者が出た時はショックでした。このような状況でしたが、1号館地区の正門横に人がやっと通れる狭い入口がありました。当時の私の生活は、その入口を通過して午前中は図書館で語学力維持のための勉強、学生食堂で昼飯をとった後、午後はクラブ活動(陸上部)という毎日でした。しかし、当時大学生活での目標が定まらず不安と絶望を感じた食物学科の同期生の何人かは、退学や転学科し、卒業時には過去最少の18になっていました。その年の9月、府警機動隊によってロックアウトが解除され、10月から授業が開始されました。前期の休講日数を補うために、同じ講義が2コマ続けて行われました。体育館での卒業式は、始まる直前に過激派の妨害で中止になりました。

した。80～90年代もキャンパスは学生寮問題や授業妨害などを巡って落ち着く様子もありませんでした……。話題を変えましょう。

平成8年、学術情報総合センターができ、学生・教職員のアメニティを向上させました。学生たちもよく勉強するようになったようです。それまでの図書館は1号館地区に入って左手(現・学生サポートセンター)にあり、暗い館内に入って目が慣れるまでずいぶん時間がかかったものです。雑誌のコピーをとるのもたいへんでした。図書館員のいるカウンターの後ろを通過して、奥の別館のフランス映画に出てくるような手動式ドアのエレベーターで目的の階まで行き、重い製本雑誌を抱えて学部まで運んでこなければなりません。学情センターはキャンパスの景観も一変させました。晴れた日に1号館玄関先に立ってみると、椰子の樹間から銀色の学情センターが圧倒的な存在感で迫ってきます。春は生活科学部の桜(樹形の美しさは随一)が満開になります。市大逍遥歌の一節にある「桜花爛漫月朧」の下で酒宴する粋な輩もいました。昔は砂利道だった学部前は樹木がうっそうと茂り、梅雨明けの蝉時雨と真夏の午後の静けさを演出してくれます。秋になると、工学部棟南の銀杏並木は目の覚めるような金色に輝きます……。杉本キャンパスはつねに寛容であり、時間の流れを包み込んできたように思います。



大学の在り方の変化と私事の変化

平成27年3月退職／現・関西福祉科学大学・大学院社会福祉学研究科長

畠中 宗一

1991年10月から2015年3月まで、23年半、生活科学部・大学院生活科学研究科でお世話になりました。家族社会学講座助教授時代は、本村汎教授から研究法の基礎を学びました。大学にまだおらかさの余韻が残っていたように思います。2000年前後から自己評価、外部評価、法人化と大学改革が急速に進んでいきました。とりわけ法人化以降、大学社会からおらかさが消えていったように思います。学部長・研究科長時代、本学の再編・統合問題が具体化し、その対応に追われましたが、多治見先生や西川先生に助けられ、役割を全うすることができました。市大時代の細やかな自負は、11名の博士論文の主査を務めたことです。卒業生一人ひとりの活躍が私の誇りです。また退職にあたっては、学科主催の最終講義やパーティを企画していただき、身に余る光栄でした。

2015年4月から関西福祉科学大学・大学院社会福祉学研究科長として仕事を続けております。社会福祉学研究科は、臨床福祉学専攻(M・D)と臨床心理学専攻(M)から構成されています。現在、3学部の小規模大学ですが、2016年度から2学部増えて、5学部体制になります。当初、組織文化の違いに戸惑うことがありましたが、半年近く経過して、やっと慣れてき

たところ。あえて難点をあげれば、通勤時間とサテライト(上六)での夜間授業です。通勤時間は、読書タイムと割り切ることになりました。サテライトは、春学期週2回21時40分まで授業があり、帰宅が23時近くになります。朝型のため、翌日が睡眠不足になります。贅沢な悩みかもしれません。

2015年6月、公益財団法人ひと・健康・未来研究財団の理事に就任しました。この関連での初仕事になりますが、12月5日(土)13時から16時45分、あべのハルカス25階で当財団主催のシンポジウム「子どもが希望を取り戻すためには大人社会のあり方が変わること?!—21世紀の子どもの現状と未来を考える—」が開催される予定です。関心をお持ちの卒業生や在学生・院生の皆さん、是非お出かけください。参加費は、無料です。またこれまでの財団の活動は、広報誌「ひと・健康・未来」第1号から第5号として刊行され、財団のHPからダウンロードすることもできます。是非ご覧いただければと思います。加えて当財団の研究助成は、医学・食品・環境・福祉の4分野で構成されています。生活科学研究科とも親和性が高いと思いますので、是非チャレンジしてみてください。

生活科学部同窓会講演会

住宅とともに歩み続けた70年 -なぜ、市大住居学科を選んだのか！-



平成26年5月30日、講師に小林昭夫氏(NPO法人 これからの住まいを考える会 理事/アーキ・エコロジー研究所 主宰/パナホーム株式会社名誉役員)をお招きし講演を行って頂きました。小林氏は昭和32年に住居学科を卒業され、建設会社を経て昭和35年に松下電工に入社、わが国初の「工業化住宅」である松下一号型住宅を開発されました。戦災復興に奔走されたお話、昭和30年前後の市大の雰囲気などを当時のお写真と一緒に

説明して下さいました。また、工業化住宅という全く新しい製品と市場を創出されたということで、まさに開拓者という印象でした。とくに、松下幸之助氏が家電のみならず、家電を包む住宅を作ることに情熱を持たれていたというお話は大変興味深かったです。今に続く工業化住宅の変遷、海外の住宅産業の視察、環境との調和など、フィールドを広げられて現在もご活躍ということで、現役学生にも教員にも大変刺激的な講演会となりました。

生活科学部居住環境学科ホームカミングデー



平成26年11月3日、大阪市立大学ホームカミングデーの一環として、住居学科・被服学科・生活環境学科・居住環境学科の卒業生が交流会を開催しました。生活科学部同窓会岸本会長(S38住居卒)、河原元会長(S32住居卒)にもご出席いただき、おもに1980年代の卒業生が懐かしい思い出話に花を咲かせま

した。また、途中、全学ホームカミングデーで講演された藤沢久美氏(H1被服卒)も合流し、学生時代の過ごし方と現在のグローバルな仕事の接点などをお話し頂きました。例年、10数名の参加で、これはこれでアットホームで良いのです。次回はもっと多くの卒業生に呼びかけようということで、お開きとなりました。

2015 ニュースレター発行に寄せて・・・



大阪長屋を保全・活用するまちづくり

居住環境学科
藤田 忍

大阪には戦前の大大阪と言われた時代の立派な長屋が残っています。阿倍野、空堀、中崎町、福島などの地域では、長屋を改修したお洒落なカフェや雑貨屋さん等が見られます。梅田から歩いて15分の北区豊崎に大きな主屋と緑豊かな路地、それを取り巻く長屋群が都会のオアシスのように残っていました。居住環境学科では谷直樹先生等を中心に、2007年からここで長屋5棟14戸、主屋1棟の保全工事を行い、震度6強まで耐え得る耐震補強工事と、古きよさを残しつつ現代の生活にフィットするモダンな改修工事という、住まいとしての長

屋再生モデルを作りました。これを広め、同時に大阪各地の活用事例と手をつなぎ、大阪長屋を保全・活用するまちづくりを進めるために、豊崎で長屋路地アートを8回、併行して全大阪レベルでオープンナガヤ大阪を4回開催してきました。オープンナガヤ大阪2014は20会場で、来場者はのべ千人を超える規模でした。今年は約30会場となる予定です。11月28、29日の2日間開催しますので、同窓生の皆様におかれましては是非足を運びいただき、大阪の宝物を御堪能いただければ幸いです。参照：オープンナガヤ大阪の公式ウェブサイト、FBページ

NEWS おしらせ

退職者

- 藤井 久美子 先生(平成26年3月)
- 細田 耕平 先生(平成26年3月)
- 山本 静香 先生(平成26年3月)
- 松島 恭子 先生(平成26年11月)
- 北辺 悠希 先生(平成27年2月)
- 小西 洋太郎 先生(平成27年3月)
- 畠中 宗一 先生(平成27年3月)

着任教員

- 西田 直子 先生(平成26年4月)
- 北辺 悠希 先生(平成26年4月)
- 中臺 枝里子 先生(平成26年5月)
- 増田 俊哉 先生(平成27年4月)
- 松木 洋人 先生(平成27年4月)
- 館 直彦 先生(平成27年4月)
- 亀田 和美 先生(平成27年4月)

訃報

名誉教授 富樫 穎 先生
(平成25年12月10日逝去)



新理系学舎 | 平成27年3月竣工
研究室や教室は明るく斬新なデザインで一新され、快適な空間になりました。

EDITORIAL NOTE 編集後記

杉本町駅南側の踏切を渡ってすぐにある田中記念館。大きなホールやレストラン「めたせこいや」のある建物といえば馴染みでしょうか。その田中記念館のリニューアルが今年完了し、3階フロアには各学部の同窓会事務局を置かせてもらえることになりました。事務机にパソコン、十分な収納スペースに加えて、ミーティングスペースもあり今後の同窓会の運営をより円滑にしてくれると同時に、他学部同窓会との交流も活発になることを期待しています。

発足から3年目に入った大阪市立大学同窓会では年3回会報を発行し、各学部の同窓会を経由し卒業

生の皆様に配布しています。一方、生活科学部同窓会のニュースレターは隔年1回の発行。ややニューズの新鮮さには欠けるかもしれませんが、会報の発行には時間もお金も必要で、隔年1回が限界ですが、今はインターネットがあります。生活科学部でもFacebookを使って、学生・教職員の活動を積極的に発信していますので、お時間のある時にご覧ください。(大阪市立大学生活科学部ホームページ内のFacebookバナーからご覧ください)

生活科学部同窓会ニュースレター編集幹事